

令和6年度 ぬたば 埜場遺跡 現地説明会資料

●遺跡立地と調査概要

埜場遺跡(ぬたばいせき)は山梨県北杜市武川町柳澤地内に所在する、縄文時代中期中葉(約5,000年前)・中期末~後期初頭(約4,500年前)・晩期(3,000~2,500年前)・平安時代(約1,000年前)の集落跡です。従来、この場所が遺跡であることは知られていませんでしたが、令和4年11月に実施した県営ほ場整備工事に先立つ試掘調査によって、新たに発見されました。

試掘調査では、工事範囲(約57,000㎡)のうち約13,000㎡において遺跡の広がりを確認しましたが、調査開始直後から数多くの縄文時代の住居跡が発見され、相当な調査期間を要することが想定されました。こうした状況から、今後の工事日程への影響を考慮して協議を重ねた結果、切土造成等の工事によって遺跡が壊されてしまう約5,000㎡を対象に本調査を実施し、残りは盛土造成で保存することとしました(裏面図参照)。本調査は令和5年2~3月に第1次調査、令和5年4月~令和6年3月に第2次調査、令和6年5月~9月の予定で第3次調査を実施しています。

●発見された遺構・遺物

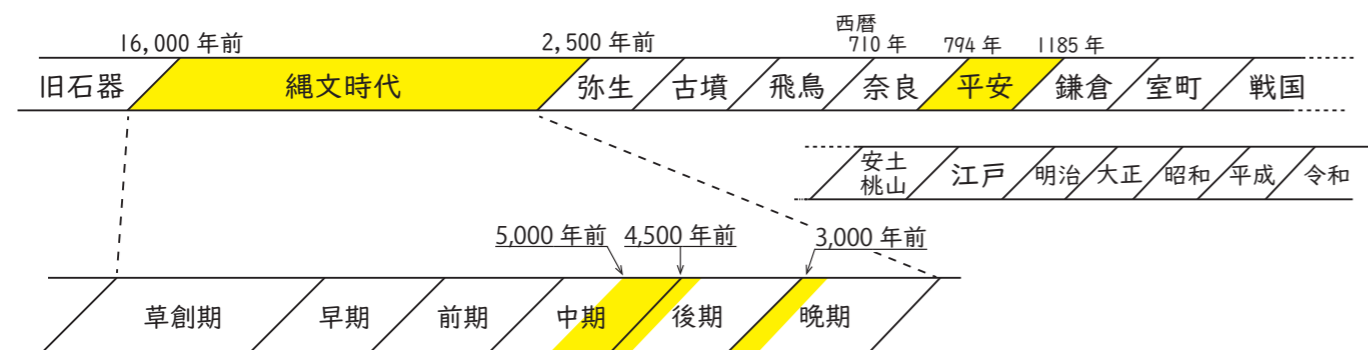
第1次調査(令和5年2~3月)

- ・発見された遺構 縄文時代晩期の住居跡2軒、配石遺構2基、集石遺構2基。
- ・発見された遺物 晩期初頭の土器(清水天王山式、大洞B1式、安行2式~3式ほか)土製品(三角形土製品1点、耳栓71点、土偶2点ほか)

第2次調査(令和5年4月~令和6年3月)・第3次調査(令和6年5月~9月(予定))

・発見された遺構

縄文時代中期中葉(藤内~井戸尻式期)	竪穴住居跡ほか
中期末(曾利V~加曾利E4式期)	配石遺構、土坑、掘立柱建物跡ほか
後期初頭(称名寺式期)	柄鏡形敷石住居
平安時代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡
平安時代~中世	炭焼窯



【調査区遠景(南西から)】



【67号住居跡】

埜場遺跡は、「石空川(いしうとろがわ)」右岸の扇状地端、東西約80m、南北約220mの北向きの傾斜地に立地します。縄文時代中期中葉から平安時代まで断続的に人々が集落を営んでいたことが分かりました。

縄文時代の竪穴住居跡は、直径約5mの円形を呈し、壁際には柱穴が巡り、中央に炉が設けられています。複数回、建て替えを繰り返した住居が多く、長期にわたり安定してこの地で暮らしていたことがうかがえます。

67号住居跡(縄文時代中期中葉)から土偶が出土しました(右)。

全長約11cm、顔と脚部が欠損しています。胸は小さくつまみ出されたような作りですが、その下に続くお腹とお尻は大きく張り出しており、妊娠している女性の様子をよく表しています。肩からのびる腕は右側しかなく、その手は子供が宿るお腹に添えられています。

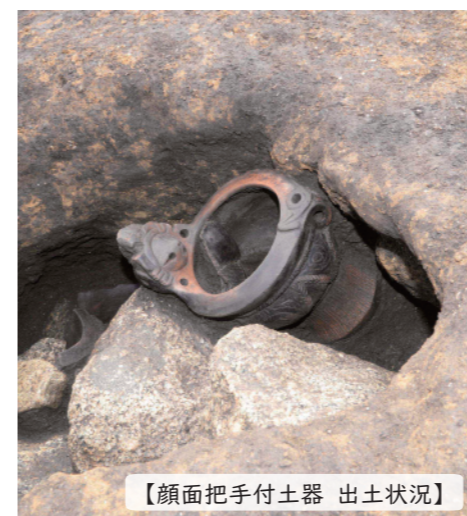
全体的に焼きがしっかりしていることに加え、表面は磨かれており光沢があります。腰からお腹、お尻にかけての造形は、ハケ岳山麓地域における土偶の特徴の一つです。



【67号住居跡出土土偶(前面)】



【67号住居跡出土土偶(背面)】



【顔面把手付土器 出土状況】



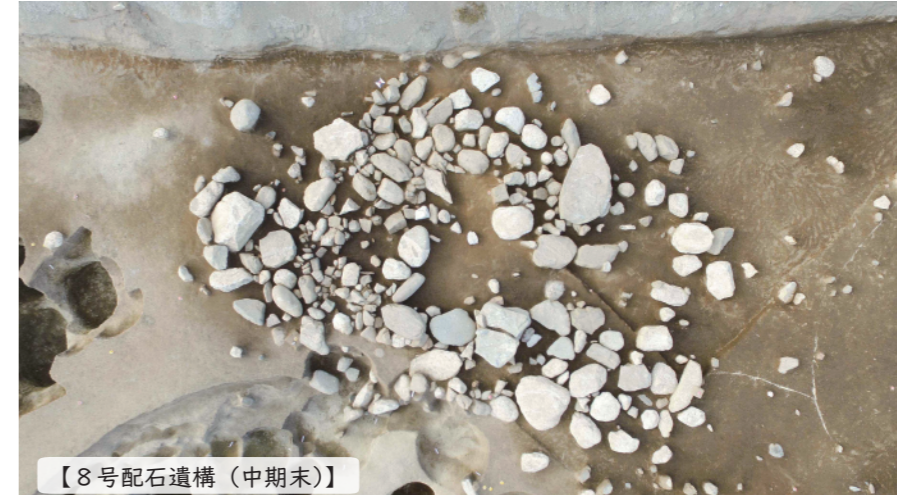
土器の縁に人面の装飾を施した土器を「顔面把手付土器(がんめんとってつきどぎ)」といいます。長野県・山梨県を中心に出土し、その多くが意図的に壊されたようにバラバラになって出土します。埜場遺跡においても、こうした土器に付いていたと考えられる顔面装飾が出土しています。

それに対し、49号住居跡からはどこも壊れることなく完全な形で、顔面把手付土器が出土しました。この出土状況は、県内外から注目を集めています。

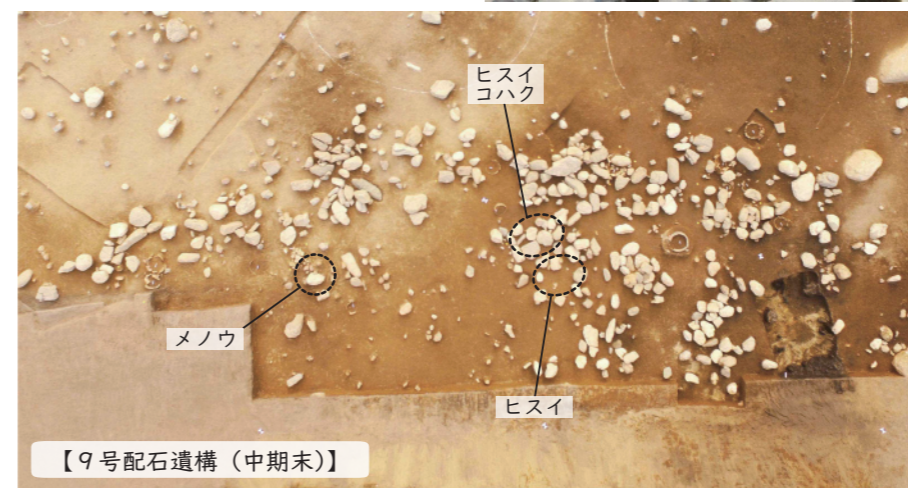
【左】49号住居出土 顔面把手付土器】

県内では珍しい、縄文時代中期末の配石遺構も発見されています。用いられている石は花崗岩や砂岩が多く、近くを流れる石空川から運び上げられたと考えられます。その量は8・9号配石遺構だけで、およそ8トンにもおよびます。

8号配石遺構(右)は大きい石と小さい石を組み合わせて、9号配石遺構(左下)は、石を環状に配置しています。配石遺構の下には墓穴と考えられる土坑が発見され、その底からはヒスイ製やメノウ製の垂飾(右下)、コハク等が出土しています。これらを副葬したお墓の上に石を配置したと考えられます。



【8号配石遺構(中期末)】



【9号配石遺構(中期末)】



【ヒスイ製垂飾】



【メノウ製垂飾】